

# 光葉ワーキングクラブメールマガジン

<2023年 8月号>



194号 2023.08.01 配信

4年前から、自宅近くの公園で、ラジオ体操をすることを日課としています。いつもは、鳥のさえずりと体操の音楽が流れる会場が、夏休み期間中だけは子どもたちの明るい笑い声であふれ、こちららもつられて笑顔になります。子どもは、1日400回笑って過ごすのに対し、大人は、15回ほどしか笑わないと言います。笑いが心や体によい影響を与えることは、医学的にも実証されています。つくり笑顔でも効果があるそうなので、疲れているときこそ、意識的に口角を上げてニッと笑顔を作ってみましょう。笑顔は、幸せを連れてきます。(ビジネスネットワーク)

## ■同窓会だより

### ◇光葉同窓会光葉緑奨学金を授与

金尾朗学長と学科長に出席いただき、光葉緑奨学金授与式を行いました。

今年度は、北海道9名、愛媛県2名、福岡県2名、熊本県4名、鹿児島県2名、大分県1名の20人に贈呈書と奨学金5万円を授与しました。



7月14日(金) 学園本部館中会議室



### ◇支部会報告 世田谷支部

6月24日(土) 学園本部館中会議室

支部結成10周年となった世田谷支部は、待ちに待った久しぶりの対面開催となりました。第1部は支部活動の報告、記念撮影、懇親会は、感染予防のためスクール形式ではありましたが、手作りのアジサイ模様のランチョンマットが華やぐ机で、お弁当をいただきました。サプライズの花束贈呈は、初代支部長、支部顧問(体調不良のため、当日ご自宅へお届け)にしました。また、支部役員はひらがなが書かれたB4サイズのカードを一枚ずつ引いてその文字から始まる文章で自己紹介をしました。最後に参加者が、並んだカードを大きな声で読みあげると「つながるせたがやしぶへ」になりました。支部長として「大学と同窓会と学生とそして支部の皆さんとさらに強くつながってまいります。」とまとめ、大いに盛り上がりました。

第2部はNHKのニュースウォッチ9などで気象予報士として活躍中の斉田季実治氏をお招きして講演会を行いました。参加者を広く募り、同窓会本部や学内に掲示していただいたおかげで学生や同窓の家族の参加もありました。昨今の異常気象などについて、気象情報を正しく理解することが自分の命を守るということになるというお話を貴重な資料と映像を見ながら聞きました。とても興味深く、質問が相次ぎましたが、一つ一つに的確にやさしくお応えをいただきました。世田谷内の福祉作業所で作った10周年おめでとうのメッセージ入りタグのついたクッキーも出されました。

当日欠席した支部の方からのメッセージを七夕のかわいい飾りとともにホワイトボードに貼りました。支部の皆さんの一体感を表しているかのようでした。(支部長 和田眞子)

◇光葉同窓会夏期休業 8月5日(土)～8月20日(日)

## ■ 広げよう光の葉

山田 タナ さん (ウヨンタナ)

1995年 大学院生活文化研究専攻(修士)卒

### 「昭和女子大学の初めてのモンゴル人留学生」

私は、たぶん昭和女子大学が建学後初のモンゴル人留学生だと思います。

1988年、まだ中途半な日本語を操りながらも生活文化学科に入学し、さらに生活美学科に編入して、憧れのアパレル全般について勉強することができました。

私は内モンゴル生まれで、当時自国を出る時、本当は、アメリカに渡って映画の勉強できたらと密かに思っていました。1980年代末、中国はまだ改革開放の国策が実施されて間もなく、国を出られるものも珍しく、それもほぼアメリカを目指していました。私の一番仲のいい同僚夫婦もアメリカに渡っていました。

しかし、私は初めての外国が日本でした。成田空港について足を踏み入れた日本の土地、その瞬間、何かホッとするような、懐かしいような感じがしました。季節は10月、東京の空は見渡す限り青くて、空気も透き通って、全てが自分の体にしっくりくるフィット感がありました。

東京についたばかりの時、水道橋の日中友好会館の寮に泊まり、友人に連れられて初めてマクドナルドに行きました。食事を終えて店を出るとき、店員さんに「ありがとうございました！」と言われて、初めてそんな接客を受けびっくりして、慌ててお辞儀をしながらも「ありがとうございました！」と言いました。そんな私を見て友人が笑っていた場面はいまだにはっきり覚えています。それからもう35年も経ちましたが、その時から、自分の中での「夢」を作り直しました。この日本に残れることができたなら絶対ファッションの勉強しようと思いました。なぜなら日本に来る前から日本の映画やドラマで主人公が着ていた服に見惚れて、どうしてあんな素敵な服が作れるのか、また日本にきてから、東京の街を歩き来する女性たちの服を見て、おしゃれな方が多くてとても憧れの的でした。当時の内モンゴルも北京も人民服一色で、まだファッションデザイナーという職業もありませんでした。

日本に来て最初の半年は、やはり理想と現実のギャップに苦しみ、孤独と経済難も味わいました。しかしある日、幸運なことが突然訪れました。内モンゴル歌舞団の著名な馬頭琴奏家のチ・ボラグ先生が東京芸術大学で演奏する時、同じ内モンゴル出身の私がそこで民謡を歌うことになったのです。その後不思議な出会いがどんどん広がり、人見楠郎先生にも出会うことができました。

日本にきて半年あまりで昭和女子大学に入学し、しかも奨学金をいただきながら大好きなアパレル全般について勉強できる、なんて幸運なことだったでしょう！

昨年、還暦を迎え、残りの人生を世界に羽ばたく子どもたちの夢作りのために生きたいと心に決め、現在仲間たちと「宇宙ザクラ・子どものミュージカル」(仮名)プロジェクトを立ち上げ中です。昭和女子大学の卒業生として、大学で学んだ知識を生かして、誰かを幸せにすることをやっていきたいです。 【End】



人見楠郎先生と、セントマイケルズ  
大学副学長のプロボストご夫婦と  
1993年大学卒業式謝恩会にて